

「海ゆかば」と新作文楽

韓 京 子

はじめに

『万葉集』に収められている大伴家持の「陸奥国に金を出だす詔書を賀く歌」に引かれた言立て「海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍 大君の 辺にこそ死なぬ 顧みはせじ」は、明治初年には招魂社における戊辰戦争戦死者追悼の祭文に用いられ、その後、宮内庁雅楽課の東儀季芳の作曲により海軍の儀礼曲「海行かば」ともなった。さらに、この儀礼曲は海軍軍歌「軍艦」のトリオ（中間部）に挿入され、行進曲「軍艦」（軍艦マーチ）となり、現在も海上自衛隊東京音楽隊により演奏・歌唱されている。

この一節が広く普及されるきっかけとなったのは、昭和十二（一九三七）年に日本放送協会の囑託により、信時潔が曲をつけ

た歌謡「海ゆかば」がラジオで放送されるようになってからである。「海ゆかば」は、国民精神総動員運動に呼応し、大日本帝国政府が国民精神総動員強調期間を制定した際に戦意高揚のために作られた、戦時体制における精神教化のための軍歌であった。十二月十五日、大政翼賛会はこの曲を「君が代」に次ぐ国民の歌に指定した。

「海ゆかば」の歌は昭和期の能や人形浄瑠璃文楽にも導入された。題名そのものが「水漬く屍」という能や文楽の新作がある。戦時中に制作された新作文楽のなかで、「海ゆかば」の歌詞が詞章に用いられている作品には、『水漬く屍』のほかにも、『軍国美談代唱万歳母書簡』、『忠霊』、『赤道祭』などがある。いずれも、支援や指導などの形で海軍や陸軍の関与がある作品である。本稿では、「海ゆかば」が取り入れられている四作品

について、当時の筋書（プログラム）に掲載された床本（義太夫節の詞章）をもとに紹介する。

1. 『軍国美談代唱万歳母書簡』

（資料1）『軍国美談代唱万歳母書簡』（架楽蔵）筋書表紙



『軍国美談代唱万歳母書簡』（資料1）は、昭和十二（一九三七年）十月二十三・二十四日の二日間、新義座により大阪北陽演舞場にて上演され、同年十二月六日、昭和十三（一九三八）年七月二十七日、昭和十六（一九四一年）一月一日には四ツ橋文楽座で再演されている。四ツ橋文楽座における再演時には、文楽座に復帰した新義座のメンバーが出演していた。

『義太夫年表昭和篇』昭和十二年十月二十三日の項には、この公演に関する『大阪毎日新聞』（十月二十一日）の記事が次のように掲載されており、文楽が新作された経緯を知ることができ

本社選定「進軍の歌」を浄曲に作曲上演、今秋の邦楽界に問題を投げかけようとしてゐる、この原作は今回の事変に「軍国の母」と讃へられた山内やす子刀自の書簡を水木要次郎氏子息水木直箭が戯曲脚色し題名は「軍国美談代唱万歳母書簡」それに「進軍の歌」を随所に織り込んだもので、飛行機の爆音、ラッパ、空爆による地上爆破、戦車の轍音など、近代科学戦のかもすあらゆる音響を義太夫の三味線で新しく表現しようと企ててゐる

「進軍の歌」は、昭和十二（一九三七年）七月三十一日、『大阪朝日新聞』と『東京日日新聞』が「わが皇軍の歩武堂々たる進軍を讀え、前線といわず、銃後といわず軍民とも唱和すべき、皇軍の歌」を募集するとの社告を出し、選ばれた本田信時の歌詞に陸軍戸山学校軍楽隊が作曲し、コロムビアレコードから発売された軍歌である。歌詞の六は「水漬き草むす純忠の屍にかゝる桜花光と仰ぐ皇軍の聴け堂々の進軍歌」となっており、「海ゆかば」の歌を踏まえ、国（天皇）のため戦死した兵士を讀え戦意を高揚する歌となっている。

「山内やす子刀自の書簡」とは、日中戦争中、海軍航空部隊所属の山内達夫中尉の戦死の知らせを受けた母、山内やす子が海軍省宛に書いた書簡のことである。息子の死を悲しむことなく祖国のために命を捧げることができたことに感謝する内容が反響を呼び、『大阪朝日新聞』八月二十六日付朝刊にも掲載され、

軍国の母として讃えられた。

この書簡をもとに、「進軍の歌」を取り入れ、水木直箭が文楽として脚色したものが『軍国美談代唱万歳母書簡』である。大和郡山の学校教員であった水木直箭は新義座の三味線方である野澤勝平の御最辰だった。そのことから、野澤勝平が山内中尉の母親の話を彼に文楽向きに書いてもらい、野澤勝平が作曲したのであった。当時出演していた竹本南部太夫によると、非常に受けがよくブームとなっていたという。すでに上演されていた『昭和義烈三勇士名譽肉弾』や『其幻影血桜日記』などと同じく、軍事劇では、戦場の壮絶な様子を三味線でいかに工夫して表現するかにも注目が集まったようである。

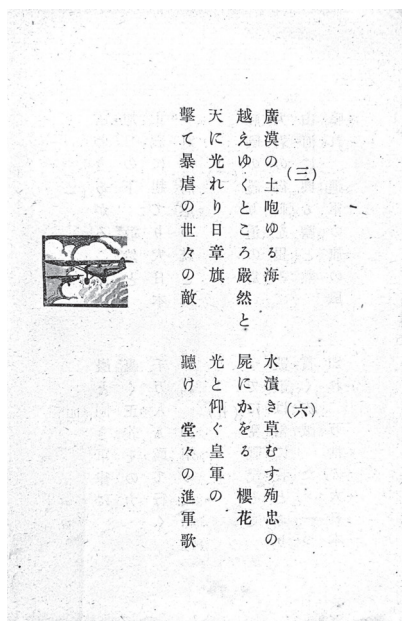
『軍国美談代唱万歳母書簡』は、第一場・〇〇海軍航空隊、第二場・山内海軍中尉留守宅、第三場・海軍省人事局の三場で構成されており、四十分程度の長さの作品であった。

あらすじは、次のとおりである。ある日、南京空襲部隊で爆撃遂行中であつた山内達雄中尉が戦死した知らせが母親に届く。兄弟は兄の死を惜しみ悲しむが、母親は「見事に戦死」しただろうと語り、最期に「天皇陛下万歳」を唱える間もなく戦死したことが心残りであつたはずだと悔やむ。母親は海軍省人事局宛に「祖国の御為に身を捧げまつる事を得候事、尊く感謝に堪へず候」とお礼の手紙を出す。手紙の中で母は戦死した我が子に代わって「天皇陛下万歳、大日本帝国万歳、大日本帝国海軍万歳」と唱える。軍ではその母の志を讃え、新聞に発表し全

国民とその感激を分かち合うことにする。この手紙を読む人はみな奮い立ち、勝利するまで戦い続けることを誓うだろうと言い、「今津々浦々に歌はる、進軍の歌勇ましく、我等もいざや歌ひなむ。」と結ばれる。

新義座の初演時の床本には、詞章とは別途に「進軍の歌」が掲載されているが(資料2)、第三場最後の「我等もいざや歌ひなむ。」のあとに、実際歌われたのかは不詳である。山内中尉とその母親を讃え、突撃に臨む兵士と兵士を送り出す家族のあるべき心構えを強調した作品となっている。

〔資料2〕『軍国美談代唱万歳母書簡』末尾の「進軍の歌」



『軍国美談代唱万歳母書簡』の冒頭は、「海行かば水漬く屍、

山行かば草生す屍、大君の為には何か惜しからん、棄て、かひある命ぞと、遠き神代の昔より、承け伝へたる武夫（もののふ）の、武勇の血こそ尊けれ。」で始まる〔資料3〕。この冒頭の序詞の詞章に「海ゆかば」の歌が取り入れられている。文楽の序詞は、一曲の語り始めを改まった荘重な雰囲気にするもので、全曲の主旨や主要な事件の内容を暗示し、その最後も祝意を込めた言葉で結ばれる。ここでは国（天皇）のために深く命を捧げる兵士は、神代からの武士の武勇の血を受け継いでいて尊いと讃える言葉で結ばれている。

〔資料3〕『軍国美談代唱万歳母書簡』の冒頭部分

軍國（いくくに）美談（びだん）代唱（だいちやう）萬歳（ばんざい）母書簡（ぼしよかん） 山内ヤス子刀自

海行かば水漬く屍、山行かば草生す屍、大君の爲には何か惜しからん、棄て、かひある命ぞと、遠き神代の昔より、承け傳へたる武夫の、武勇の血こそ尊けれ。
爰に昭和十二年、排日毎日血迷へる、暴逆支那軍騎鷹の、軍は遂に擴がりて、國際都市の上海に、斷乎起らたる我海軍、陸戦隊は寡兵もて、よく大軍を支へしが、敵の飛行機襲來して、多くの民を殺傷す。無道極まる支那空軍、いつかは撃滅せんものと、待ちにぞ待

昭和十六（一九四一）年一月一日の文楽座における再演時の筋書には、新たに「大阪地方海軍人事部指導」と書き加えられている。地方海軍人事部とは、地方における海軍志願兵の徵募、

招集、簡閲点呼、軍事指導、職業補導、軍事扶助、在郷軍人會に關する事項、軍事普及など兵事事務全般にわたり内容を充実に向上させ、兵員素質向上を図るために設置された部署である。この地方海軍人事部は、人事関連の業務だけではなく、軍事講演や映画など宣伝活動にも力を入れていた。映画だけではなく、古典芸能の文楽においても海軍の宣伝活動が及んでいたのである。ただ再演に際して、初演時の詞章から変化はなく、大阪地方海軍人事部によってどのような指導があったのかについては不詳である。

再演時の筋書には、次のような文楽座の挨拶が掲載されている。大政翼賛のもと一億国民が大躍進を為す可き新しき年の始めにあたり当座に於ては健全なる娯樂を通じての日本精神昂揚の実を挙ぐることに更に一層の努力と精進を払ひ（中略）此度は曩に今事変に於て我海鷲の華と謳はれたる山内中尉と其母堂の忠烈なる事蹟を追想して美はしき物語を上演するを始めとして（中略）一層の報國精神に燃えて必死の奮闘を以て御意を得可く候間（後略）

昭和十五（一九四〇）年十月に大政翼賛會が発足し、十二月十四日には大政翼賛會実践要項が発表され、国民も戦時体制への協力を求められた。昭和十二（一九三七）年、国民精神総動員

運動が推し進められた際、松竹の社長に就任していた大谷竹次郎は「如何に演劇をやつて行くかと申しますより、如何に銃後の国民として、演劇を国策の線に添はせるか、さうして、演劇といふものを通して、如何に国家に御奉公するかといふことを考えてゐる訳であります。」と語り、戦時下では演劇報国として国策に沿つた活動方針を立てていた。ちなみに、松竹では映画報国を遂行するためこの軍歌「進軍の歌」を、陸軍省の指導・後援により積極的に独占映画化していた。文楽座を経営していた松竹では、大政翼賛会が結成されて実践要項が発表されて間もない時期における公演に、再演ではあるが「軍国美談代唱万歳母書簡」を舞台にかけていたのである。

2. 『忠霊』

『忠霊』は昭和十七（一九四二）年三月に四ツ橋文楽座で初演された、西亭が脚色、作曲した一幕の作品である。観世委員会原作の能『忠霊』を脚色し、中部軍報道部の後援により「陸軍記念日に因みて」上演された作品である。陸軍記念日は、明治三十九（一九〇六）年一月に日露戦争の戦勝を記念して制定された。明治三十八（一九〇五）年三月十日の日本軍の奉天での勝利に因むもので、各種行事が行われ、陸軍の宣伝、国民教化の場としても利用されていた。

能『忠霊』は、昭和十六（一九四一）年、大日本忠霊顕彰会の委嘱によって制作された。『未刊謡曲集』続九の田中允氏の解

題によると、大槻十三・坂井音次郎・武田太加志・浅見真健が委員となつて、「聖戦の楯となつた忠霊に対する国民的感謝の念から作られた曲」であり、「戦時下の国民の忠誠心を能によつて表現しよう」と試みられた時局ものである」としている。

能『忠霊』は、十一月に靖国神社に奉納され、華族会館恩賜舞台における公演は二千名の観客を動員しただけでなく、初演はラジオでも中継放送された。各地で上演され、レコードや謡本の出版とも提携し、これまでにない規模で享受されたという。さらに、中国やシンガポールなどの外地でも上演されていた。時局物のなかでも上演数の多さだけではなく、文楽、歌舞伎、宝塚など他ジャンルへの脚色・上演が多かつたことから、異例なほど広く享受されていたことがわかる。この作品が好評であつたことから、海軍省の命によつて能『皇軍艦』が制作された。

能『忠霊』は、ある国士（ワキ）が忠霊顕彰のため諸国を廻つていたが、靖国の忠霊塔にたどり着き、勤労奉仕の群衆のなかに親子と見られる二人（シテ）に出会う。国士は後に社頭で再会しようとの男の言葉に従い靖国神社に行くと、武人姿の忠霊が現れて奮闘し戦死した様を見せ、舞を舞つて御代をことほぎ、皇国を礼賛するという内容である。

文楽『忠霊』は内容および詞章もほぼ能『忠霊』から取り入れており、能の体裁で展開する。筋書に掲載された挿絵も、『観世流新曲忠霊』（大成版謡本、檜書店、昭和十六年十一月）の挿絵と

同一である。

文楽『忠霊』の筋書には、以下のような文楽座の「乍憚口上」のほか、『忠霊』の床本の部分には、別途白井松次郎の挨拶が掲載されている。

「乍憚口上」

皇軍の向ふところも恰も日月の照らすが如く、新嘉坡すでに陥ち、敵のあるところ悉く灼き尽されんとする烈々の有様、まことに有難き国威を拜しては唯々涙に咽ぶばかり、御同慶に堪へざる次第でございます。(中略)愈々戦域御奉公の一途に邁進いたしました此度は殊さら堂々の名狂言を連らぬるを始め、茲に大東亜戦争の為め尊き礎石と為られたる我忠勇の戦没将兵諸氏の霊を弔はんとして、特に「忠霊」なる一幕を謹んで新作上演し、皆様と共に感謝の一端を捧げたいと念願いたす次第であります(後略)

「御挨拶」

大東亜戦争の赫々たる武威を讃へつ、一方には幾多殉忠の英霊に対して唯々感謝感激の涙に浸るばかりでございます。就きましては此度開戦以来の御英霊に謝するの一端として、謹んで新作曲を構成し、皆様と共に御在世の頃の壮烈なる御武勲の程を彷彿いたしたいと存じまして、此度「忠霊」一曲を特に上演いたします次第でございます。

「口上」と「挨拶」のいずれも、戦勝を祝し、戦死者の英霊に感謝し弔う目的を掲げ、『忠霊』を選び上演したと記されている。文楽座では、上演に先立ち、三月一日に大阪護国神社へ『忠霊』の奉納演奏を行っている。松竹代表、出演する太夫、三味線、関係者一同が社前に整列して、戦捷を祈願し、仮舞台において「忠霊」全曲を演じた。

文楽『忠霊』の梗概も能『忠霊』と違はない。能の、国士が繰り返す御稜威を仰ぐ言葉や諸国を巡り教化の旅に出る理由を語る部分などは、文楽では省略されている。結びの部分は能『忠霊』と同じく、「武士の死所を得て海行かば水漬く屍山行かば草むす屍大君の御代萬歳を唱へつ、花と散りゆく靖国の」と「海ゆかば」の歌が取り入れられている。忠霊が戦場において奮闘し壮烈な最期を迎える際、天皇万歳を奉唱しながら喜んで命を捧げた様を表現した結びとなっている。

3. 「水漬く屍」

文楽『水漬く屍』は昭和十七(一九四二)年四月に四ツ橋文楽座で初演された。大阪地方海軍人事部指導により、西亭が作曲したものである。昭和十八(一九四三)年五月には、海軍記念日を記念して、四ツ橋文楽座で再演され、昭和十八年七月にも新橋演舞場で再演されている。一幕三場で四十分程度の上演時間である。第一場は「広島県下川追村」、第二場は「出發前夜(〇艦甲板上)」、第三場は「川追村上田家墓地前」で構成されてい

る。

昭和十七（一九四二）年四月の四ツ橋文楽座筋書には、以下のような文楽座の「乍憚口上」のほか、『水漬く屍』の床本の部分には、別途白井松次郎の挨拶が掲載されている。

〔乍憚口上〕

南方での目醒ましい躍進と日毎に高まる国威の輝きには唯々感謝感激あるのみで皆様と共に誠に存ずる次第でございます。就きましては当座に於ても愈々郷土芸術の本領を發揮して十分に戦域御奉公の一念を徹底いたしたいと此度は更に最近我海軍の亀鑑と仰がれ賜ひたる九勇士の御事蹟の一部を謹んで上演いたし聊かなりとも精神作興の一助とも相成るを得ば幸甚と存じ

〔挨拶〕

海軍特別攻撃隊の壮烈鬼神を哭かしむる壮挙は実に身も慄ふばかりの感激を以て承り九勇士に対する感謝の言葉は何んと申上げてよろしいか殆んど適當の言葉も見出せない次第でございます。就きましては、当座人形浄瑠璃に於きましても、せめては感謝の一端をあらはす可く聊か御事蹟の一部を脚色さして頂きまして、皆様と共に此感激を新たにいたしたいと希ふ次第でございます。而し、もとより充分とは参りませぬが、私共の微衷の存しますところを御諒察願ひまして、宜敷御観覧の程を希上ます。

「口上」、「挨拶」ともに、九勇士の壮挙に感謝の意を表して

いる。昭和十六（一九四二）年十二月八日、真珠湾攻撃において特殊潜航艇による特別攻撃隊として参戦し、戦士した九名の海軍兵士は「九勇士」、「九軍神」として讃えられていた。その九勇士の事績をもとに文楽作品を制作、上演し、その上演を通じて、英霊に感謝し、精神作興の一助とならんことを語っている。

梗概を次に記す。上田定二等兵曹が帰省した際、母に有事の際は立派な帝国軍人として、国に命を捧げるようにと言われる。帰隊後、横山海軍中尉と皇恩に報うべく真珠湾特別攻撃隊として出撃に臨む心構えを語り合い、故国との最後の別れに臨み、皇居に向かつて聖寿の万歳を寿ぐ。場面は上田家墓地前に変わり、両親が息子の戦死について讃えて拝み、靖国神社での参拝を約束する。最後に九勇士を讃えて結ぶ。

第三場「川追村上田家墓地前」は次のように始まる。

海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍大君の、為には何ぞ命をや、何惜しからぬ軍人、香りも床し梅の花、一片散るや君に忠、二片散るや父母に孝、散りにし後ぞ結ぶ実の、家門の誉れ過ぐる日の幼姿の偲ばる、

息子の戦死の知らせを受けた両親が墓で拝む場面の冒頭に「海ゆかば」の歌が取り入れられている。第二場では、出発前夜、潜水艦の甲板上で九勇士は互いに「御国に殉ずる事は至高の名

「死所をえて魂の御楯と散り皇恩の万分にも報ひ」奉ると、覚悟を語り合う。その後の攻撃や戦死の場は描かれずに第二場は終わる。第二場の生前の覚悟の言葉から第三場の上記の「海行かば」の詞章に繋ぎ、生きて帰ることはないとの覚悟の上で戦地へ赴いた兵士の戦死をほめかしている。

先述したように、この作品は昭和十八（一九四三）年五月に海軍記念日を記念して再演された。海軍記念日は明治三十九（一九〇六）年三月に日露戦争の戦勝を記念して制定された。明治三十八（一九〇五）年五月二十七日の日本海海戦の勝利に因むもので、海軍の宣伝、国民教化の場としても利用された。昭和十二（一九三七）年六月二十四日に次官会議決定された「国民教化運動ニ関スル宣伝実施基本計画」によると、陸軍省は陸軍記念日と満洲事变記念日、海軍省は上海事变記念日と海軍記念日、黄海海戦記念日に宣伝を実施することが規定されている。乙号宣伝実施事項には、海軍省の行事として、「記念映画、演劇、音楽等の公開指導」が挙げられている。昭和十六（一九四一）年五月初演の文楽『海国日本魂』も第三十六回海軍記念日を記念したものであり、大阪地方海軍人事部が指導という形で関与していた。

『水漬く屍』については、「たゞ戦死といふ暗い面だけが強調された『水漬く屍』などといふ時局便乗の新製品」という不評もあるが、『演芸画報』昭和十七（一九四二）年五月に掲載された文楽の四月興行についての樋尻添花の評には「その次に海軍

特別攻撃隊から取材した『水漬く屍』といふ新作があつた。物が物だけに批評を慎みたい。ただ松竹の企画は、常に時代を把握してたとへ文楽たりとも、新体制化の社会教化の一翼たるの使命を保たしたいといふ点は、芸術的性能の如何を離れても注目してやつて可いと思ふ。」とある。時局柄憚られたのか、内容に關する批評は控え、文楽座を運営する松竹の国策へ沿う興行方針について肯定的に評価している。

能にも『水漬く屍』という名の作品がある。ミッドウェー海戦を取り上げていることから昭和十七（一九四二）年から二十（一九四五）年八月十五日以前の作と推定される。山口多聞提督、加来止男提督が航空母艦「飛龍」と共に太平洋に沈んだことを描いている。ただ、文楽『水漬く屍』は、能の形式をとつてもおらず、能『水漬く屍』とは内容も異なっており、能とは関わりなく制作された作品である。

4. 『赤道祭』

文楽『赤道祭』は昭和十八（一九四三）年六月に初演された。大阪地方海軍人事部指導で、佐古少尉原作の謡曲『赤道神』を西亭が作曲、脚色したものである。藤間藤三郎振附で能仕立ての作品である。

謡曲『赤道神』は、大本営海軍報道部の委嘱により観世鏡之丞がその詞章の改定を行い、五月の海軍記念日に合わせ観世能楽堂にて能『皇軍艦』として上演された。当時、ラジオ放送、

レコード録音販売もされ、能「忠霊」とともに流行したという。^①謡曲「赤道神」は日本海軍潜水艦（伊号第二十九潜水艦）の艦内誌「不朽」創刊号（昭和十八（一九四三）年）に掲載されたものであることから限られた人物しか見ることができず、改作した能「皇軍艦」の方が上演され広く知られている作品であった。そのためか、文楽「赤道祭」に関する劇評には能「皇軍艦」をもとにした作品、あるいは能「皇軍艦」に劣るというような記述が見られる。実際、詞章が類似するのは能「皇軍艦」の方でもある。^②

赤道神とはギリシャ神話の海の神ポセイドンのことで、ポセイドンは水域を支配する神であるが、粗暴で嵐を引き起こし船を難破させる神としても恐れられており、海神を鎮める儀礼として船が赤道を通過するときには赤道祭という祭りが行われていた。赤道祭は道化芝居的な祭り、最も多く赤道を通過した者が海神に扮装し下界へ降り、船中の一同がこれを迎え、船長が海神から赤道を開く鍵を受け取るさまが演じられ、仮装行列などが行われていたという。^③原作の「赤道神」は艦内誌「不朽」に掲載されていたものであるが、実際艦内で行われた赤道祭を題材としており、登場人物も艦内に同乗した大佐や中佐などを当て込み、英米を非道な敵、鬼と蔑視する場面や潜水艦の専門用語などが登場しておりリアルな表現となっている。この部分は、能「皇軍艦」では削除されている。

文楽「赤道祭」については、「紋十郎の赤道神が荒れ狂った」赤

道祭」（なんといふ能の「皇軍艦」との相違よ）、「艦長や砲術長に踊りの振りをつけるのも可笑しいが（中略）作の厳しい精神を掴んでか、ればこんな馬鹿らしいことは出来ない筈である」と不評であった。しかし三宅周太郎は「新作は幼稚でも東亜共栄圏内なる広い地域の、芸能の啓蒙運動の重要性を考える時、文楽と雖も新作を閑却すべきではない。某知友が今度の新作「赤道神」を見て、以上の如き気持でなら満更すてたものでないといつてゐた」というように、日本精神作興の目的という点では評価していた。時局物ということから、内容についての評価は控えられ、稚拙な演出であっても、英霊への感謝、慰霊、そして戦意高揚という側面から評価されるべきとされていたのである。

文楽「赤道祭」は能の体裁で展開しており、あらずじは次のようである。ワキ（司令官・艦長）は聖戦完遂の勅詔を受け潜水艦で南海に出撃する。艦長は赤道近くに至り、赤道祭を執り行うことを命じる。台風が起るが、司令官は神霊によるものであるうと言ひ、神意を慰め戦勝を祈願することにする。シテ（赤道神）が現れ、大日本帝国の軍艦の武勇を試したものであると語る。赤道神は司令官に「世界に無二の国体」とは何かと問う。その答えに満足した赤道神は、「皇魂見極めけり」と聖戦の完遂に進めと言ひ、四海の諸神と守護することを約束する。波風も収まり、軍艦は南海へ突き進む。

文楽「赤道祭」の冒頭部分は、ワキ（艦長）が、大東亜戦争

が勃発して聖戦完遂の詔勅が下り、出撃の途に上ったと語る「名乗り」がある。その後には「秋ぞ今、秋ぞ今、一死報國盡忠に、海征かば水漬く屍山征かば草むす屍大君の邊にこそ死ぬめかへり見はせじ天が大和島根の朝ぼらけ霞むは花か雲霧を分けつ、進む軍艦、はや蓬萊に出で汐の月の光りに見まもられ波路はるけき幾海里。」とうたう。「海ゆかば」の歌は、出征の際に、自らの命を捧げ国に報い尽くす誓い、覚悟の言葉として用いられている。導入部分も「今日よりはかへり見なくて大君の醜の御楯と出でたつ我れは皇國の民草と、生まれおふこそうれしけれ、生まれおふこそ嬉しけれ。」とうたわれており、冒頭で繰り返して国のために殉ずる軍人の心構えとして強調されている。これは『万葉集』巻二十の今奉部与曾布の防人歌「今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ我は」をもとにしたものである。昭和天皇の宣戦布告に関して情報局次長、奥村喜和男が談話で取り上げたことにより、古代から愛唱され続け、「国民が一体となって天皇に命を捧げ国を護る覚悟を詠んだ歌」と意味付けられ流布したとされる⁽¹⁾。

文楽「赤道祭」が上演された昭和十八（一九四三）年は、学徒戦時動員体制確立要綱が決定されたほか、国民徴用令改正公布や、徴兵適齢臨時特例公布により徴兵年齢が下がるなど招集や動員が拡大していた時期であった。文楽「赤道祭」の冒頭に、新たに意味付けされ流布した『万葉集』の歌を連ねていることも、このような緊迫した戦況の表れであると考えられる。

以上の四作品は、日中戦争開戦後以降、いずれも戦意高揚を目的とし、新たに創作されたものであった。時局物は、その後も再演され、陸軍記念日に因んで『壮烈荒鷲魂』が新たに作られた。先述したように、時局物ははじめの頃は物珍しさから興味を持たれることもあったが、戯曲としては不評の声も多く、内容面からしても今後も再演されることはない作品群である。ただ、架空の人物の物語ではなく、多くの戦死者を扱ったものであった。これら作品の上演により、亡くなった者の鎮魂劇という文楽本来の役割は果たせたのではないかと思いたい。

注

- (1) 小松（小川）靖彦「大伴氏の言立て「海行かば」の成立と戦争下における受容―その表現および戦争短歌を通じて―戦争と万葉集」―『国語と国文学』第95巻第5号、二〇一八年七月。
- (2) 海上自衛隊東京音楽隊（MSDF BAND, TOKYO）「行進曲「軍艦」にこい」<https://www.mod.go.jp/msdf/tokyoband/gallery/download/gunkan-2.html>（参照二〇二二年十一月二十九日）
- (3) 小松（小川）靖彦、前掲論文。
- (4) 戸ノ下達也「音楽を動員せよ 統制と娯楽の十五年戦争」青弓社、二〇〇八年
- (5) 四ツ橋文楽座の床本は独立行政法人日本芸術文化振興会国立劇場図書室・国立文楽劇場図書室に所蔵されている。
- (6) 四ツ橋文楽座の開場に伴った興行方針の変更により、出演機

会を失った若手の三味線や太夫らが文楽座を脱退し、昭和十一年(一九三二)年に新義座を創立した。素浄瑠璃で、または乙女人形を伴い日本や朝鮮、台湾など各地を巡業した。一座には南部太夫やつばめ太夫、三味線の野澤勝平などがいた。『軍国美談代唱万歳母書簡』は、文楽座脱退後、第二回目の公演であった。

(7) 池井優「戦争と音楽―明治維新から大東亜戦争まで」『法學研究』第84巻第5号、二〇一一年五月。

(8) 竹本綱太夫『でんでん虫』布井書房、一九六四年、竹本南部太夫・聞き手高木浩志「新義座のころ」『上方芸能』八十九、一九八五年十月。

(9) 四ツ橋文楽座における再演時の床本には「進軍の歌」は掲載されていない。

(10) 近石泰秋『操浄瑠璃の研究』風間書房、一九六一年。

(11) 大阪地方海軍人事部創設は昭和十二(一九三七)年である。

(12) 『外交時報』外交時報社、昭和十二(一九三七)年五月十五日、『東京朝日新聞』(昭和十二(一九三七)年四月二十七日)

(13) 木村美幸「軍縮条約失効後における海軍の地方拠点形成」『日本歴史』86号、二〇二〇年九月。

(14) 『時局と演劇』『演芸画報』一九三八年八月。

(15) 『朝鮮新聞』一九三七年八月二十八日付記事に、「無敵皇軍を鼓吹する全国民合唱の珠玉篇として大毎、東日募集の戸山学校作曲「進軍の歌」はいち早く松竹大船が映画報国の合唱の真髓として積極的に之を独占映画化する事に決し、一億同胞の合唱

のために全力を捧げることになった。これは脚色は斎藤良輔が担当、監督は昨年度「少年航空兵」を快打せる佐々木康と決定陸軍省の指導後援と相俟つて国防婦人会、大船軍事奉公会を初めとして主要配役には第一線スターを網羅し、軍国映画の王座を占むべく戦雲頻りなる秋の映画界に君臨すべき大作として廿一日制作開始の宣言を掲げた。」とある。

(16) 大日本忠霊顕彰会とは、昭和十四(一九三九)年七月に国内における忠霊塔(主に陸軍の戦没者の遺骨を埋葬した慰霊施設)建設推進を目的として陸軍関係者を中心に作られた組織。佐藤和道「戦時下の能楽―「忠霊」「皇軍艦」を中心に―」『演劇学論集』第65巻、二〇一七年十一月。

(17) 『未刊謡曲集』続九、古典文庫、一九九二年。

(18) 佐藤和道「戦時下の能―複製技術の浸透と軍国主義」『演劇映像学』二〇一一年四月。

(19) 富山隆広「戦時中新作能(忠霊)の展開」『楽劇楽』第28巻、二〇二一年五月。

(20) 富山隆広前掲論文。

(21) 佐藤和道前掲論文、「観世」14巻5号、一九四三年五月。

(22) 富山隆広前掲論文。

(23) 昭和十七(一九四二)年三月、四ツ橋文楽座筋書に掲載された白井松次郎の「御挨拶」。

(24) 「浄曲」「忠霊」大阪護国神社に奉納演奏」『文楽芸術』第七号、一九四二年四月。

(25) 筋書には「皇国の興廃此一線に在り各員一層奮励努力せよ
輝く海軍記念日」との標語が付されている。

(26) 「(甲) 政府総掛りの二行フ宣伝」と「(乙) 各庁計画ニ依り実
施スルモノ」とに分けられていた。

(27) 『国民総動員実施概要』第一輯、内閣情報部、一九三八年。

(28) 安藤鶴夫「空虚な人気」『浄瑠璃雑誌』「文楽評切抜帳」第42号、
一九四三(昭和十八)年十月

(29) 西野春雄「新作能の百年」一『能楽研究』29、二〇〇五年五月、
田中允編『未刊謡曲集』続十四、古典文庫、一九九四年。

(30) 「大本営海軍報道部」か「海軍省」の依頼によるものなのか明
らかではない。東谷櫻子「新作能皇軍艦の諸問題」『昭和女子大
学大学院日本文学紀要』28、二〇一七年、東谷櫻子「伊号第二九
潜水艦艦内誌「不朽」について」『戦争と萬葉集』創刊号、
二〇一八年十二月。

(31) 『未刊謡曲集』続十四所収解題。

(32) 『浄瑠璃雑誌』「文楽評切抜帳」第42号(昭和十八年八月)、第
42号(昭和十八年十月)

(33) 謡曲「赤道神」のテキストは佐藤和道「戦時下の能楽―『忠霊』
『皇軍艦』を中心に―」所収の翻刻を参照した。富山隆広「時局
能(皇軍艦)」と「赤道祭」『日本文学論叢』第49号、法政大学
大学院日本文学科学研究誌、二〇二二年二月

(34) 『日本大百科全書』「赤道祭」項目(新谷尚紀執筆)、米田文孝・
秋山暁勲「伊号第29潜水艦とスパス・チャンドラ・ポース」『関

西大学博物館紀要』第8巻、二〇〇二年三月。

(35) 東谷櫻子「伊号第二九潜水艦艦内誌「不朽」について」『戦争
と萬葉集』創刊号、二〇一八年十二月。

(36) 安藤鶴夫「空虚な人気」『浄瑠璃雑誌』「文楽評切抜帳」第42
号(昭和十八年十月)

(37) 小川靖彦「日中戦争下における「醜の御楯」の意識―聖戦短
歌を通じて(戦争と萬葉集)―」『日本文学』第64巻第5号、
二〇一五年五月

(はん・きよんじや／青山学院大学教授)